

Title	館名[聚]落
Author(s)	小葉田, 亮
Citation	地球 (1936), 26(2): 113-123
Issue Date	1936-08-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/184587
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

茸狩は北方にも所々に行はれ、又可部方面には螢狩、栗拾ひなども行はれる。スキー場は西方及び北方にあるが何れも稍遠きに過ぎて、時間及び費用の點から大衆向となつてゐない。

むすび

廣島市の郊外は東北西の三方面に於て夫々特色ある景觀を呈してゐる。東方は職工の供給地

館名聚落

小葉田亮

- 1、館名聚落の分布
- 2、タテの意義と館名聚落の地形的位置
- 3、館名聚落の分類
- 4、結語

1、館名聚落の分布

館の字を用ひた聚落名は東北に多い。此の種の聚落名については、柳田先生の御考察が既にあり、我々の間然する所ではないのであるが、

域、北方は野菜の供給地域、而して西方は休養地域たるの色彩が濃いのである。又市域内について云へば、西部は花卉、南部は蔬菜、東部は太工場の分布が著しい。而してかゝる相違は何れも地勢・地質・氣候等の微細な相違が主な因子となつて働いてゐるものである。

筆者は唯其の分布について、少しく具體的に見ようと思ふ。館の字を用ひた聚落は、西南日本にても無い事はない。豊前宇佐郡の驛館村、博多・長崎市内の館内なる町名は夫であるが、是等はクワンと音し、朝鮮に多い館里・館洞の場合とその發生意味を同じくするものであらう。

丹波何鹿郡の山村に館、加賀の手取川扇狀地に館畑村があるが、共にタチと訓してゐる。而して是等の地名を除けば館はタテと讀まれ、その分布も東日本に限られる。但し館と館の文字の別は頗る曖昧で、地域的にも系統を缺く。館の變形と解す可き楯は、羽前に見られ、甲府盆地に於ける中楯、伊賀盆地に於る楯岡も、之に屬すと思はれる。左に館・楯の文字を含める聚落名を拾録すれば、云ふ所の分布狀況を知り得よう。

越中	越後	岩代	磐城	羽前	羽後	陸前	陸中	陸奥	北海道(渡島)	都市
		1		1	3	1	1	1	1	
1	1	2	3	2	5	2	1	9		村
3	8	9	2	2	13	4	3	32	2	大字
10	3	9	1	4	41	3	19	11	4	其の他

[illegible]

(手許資料の不足により町村名・大字名以外には、含まれない地名も多少あらうと思はれる)

而して、その群集せる地方は、陸奥灣沿岸津輕平野南部・大館・横手・會津の各盆地を最とし、馬淵・北上・阿武隈の各河谷・子吉川流域が之に

次ぎ、北陸では蒲原平野と越中山麓部を擧げ得。要するに本朝文化の東方發展面に於て、此の地名が指摘される事は注目すべきである。

2、タテの意義と館名聚落の地形的位置

タテとは、從來の解釋では、武具の一種で、轉じて武家の居邸を意味すると云ふ。館をタテと讀むか否かは別として、鎌倉武士の居館名は東鏡にも散見し、東國に多くの「館」の所在せし事は察知し得る。吉田東伍博士の如きは、東北の館名聚落を以て、明に武士の居館に發生せるものとしてゐられるが、例へば、佐竹氏封内に於て、館は封邑の一格式で、其の領主を館持チと稱し、花輪・毛馬内の町も元和以後夫々館と稱せられた。同封内山本郡入森村本館の如きは延寶元年多賀谷(佐竹家臣)臣山田正右衛門なる者の始めて開いた事が享保頃の書に見え、或は現時、北海道渡島國に散在せる數ヶの館名聚落は、箱館村を除いて何れも古書(松前島郷帳元祿十三年)に見えず、共に幕末兵戰に際せる記念物

たる事を暗示してゐる。かるが故に、武士居邸或は要塞としての解釋は一樣には排斥され得ない。

タテが低濕地に臨む臺地先端を指す地形語であると云ふ柳田先生の御高説は、我々の唯傾聽す可きのみであるが、試みに二・三の館名聚落の地形を例示すれば(羽後國に於ける)

(1) 山ノ手地形

洪積臺地上

大館町

河岸段丘上

山館(北秋田郡)

海成段丘崖上

岩館・本館(山本郡)

開析扇狀地

丸館(鹿角郡)

(2) 低平地形

山崖下

柳館 館ノ下(河邊郡)

微扇狀地

本館(仙北郡)

氾濫原

花館・寺館尻引(仙北郡)

低濕地

國館(仙北郡)

赤館(能代港町内)

となり、先づ以て、その地名の意義は、實際

第一圖



1:50000 (花輪)

第二圖



1:50000 (刈和野)

の地形と一致せる場合が多い。但しタテなる語は普通名詞としては現在用ひられてゐないから若しも此の純粹地形語としての發生のみに解する限り、館聚落名の成立は、可なり古い時代に屬せるものと見なければならぬ。かくて、館の文字に拘泥し勝ちな我々は館名聚落の流用を次の如くに説明するであらう。凡そ東北邊境の開發は、一に武力を先驅とす可く、一に低濕を避けた高燥地定住を捨石とす可き事は推斷して誤りない。即ち我々は奈良朝以降、東北拓殖の景相として、臺地上に散在せる屯田式聚落を想像し得る。この時、方言にして既成地名たりしタテと、中央文献に記載された館^{*}(邸宅としての)との合一は、かのシロと城とに於ける如き

現象として成立したのでは無からうか。中世以來武士の居邸若しくは領邑としての館が流用され確立され、群雄爭覇・封建成立に應じて、澎湃たる館名聚落の増加を結果したのであらう。換言すれば、タテの語源は地形に關しながら、館名聚落は長き歴史の中に、歴史的意義をも探るに至つたのである。その間、地名の地形に對する適否による自然淘汰や、傳説の附加が行はれ或は新田聚落の形成・聚落の移轉・廢立もあつたと思はれる。云ふ迄もないが、何れの稱平に限らず、今日の村名は、單一聚落名ではないから、その語源の因果考察は價值少い。

3、館名聚落の分類

聚落名を其の語字の意味によつて、分類する事は、亦一つの發生史的考察に對する手懸りであらう。館名聚落に於て、かゝる分類を試るならば、如上の歴史的解釋對地形的解釋の問題に與へられる暗示は多少其期待し得よう。

(a)單に館のみを地名とせるもの

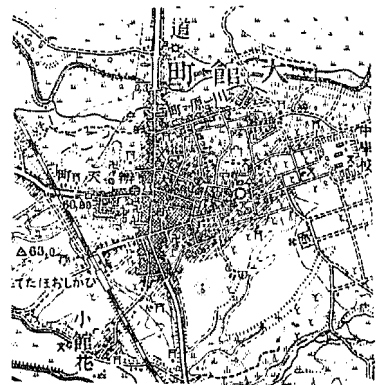
館と稱される聚落名は、陸中國(岩手郡)・陸前國(玉造郡)・同國(本旨郡)・羽後(由利)・同國(仙北)・岩代(安達)・同國(安積)・越中(西礪波)・能登(羽咋)・同國(鳳至)・加賀(石川)・北海道渡島の各地に其の例があり、村名も陸奥國三戸郡に見られる。その他羽後(仙北)の館郷或は越中(婦負)の館本郷も之に類す可く、史的意義を表せるものに能登(羽咋)・磐城(田村)の御館・及び陸奥(二戸)・筑前(遠賀)の館屋敷がある。

福井市橋南にある館町はヤカタと讀み、明治改正の新町名であるから、その性質を異にする。

(b) 大小を附するもの

大館と稱される聚落は可なり多く、館聚落集團地に在るのを普通とする。大館町は米代川とその支流長木川との間の洪積臺地上に位置し、標式的タテ地形を示す。此の地名の成立年代は知る由もないが、中世以前より此の形勝の地が城塞としての位置を提供してゐた事だけは事實である。その他陸奥(西津輕)・同國(三戸)・羽後

第三圖



1 : 50000 (大館)

現在の沖積地と舊堆積面たる臺地との高差は十乃至十五米ある。

(雄勝)・同國(角間川町内)・上野(屋島町内)の大館、陸中(下閉伊)の西大館及び羽後(飽海)の大楯がある。小館は陸奥(東津輕)・羽後(仙北)・越後(北蒲原)の各地に散見する。

(c) 位置を表はす語を附せるもの
先づ方位によるものでは

東館…磐城(東白川)及岩代(耶麻)
西館…北海道福山町内
南館…越後(北蒲原)
北館…羽後(由利)

次に上下によるもの

上館…陸中(九戸)・越後(北蒲原)・越中(中新川)・加賀(能美)

下館…常陸下館町 羽後(南秋田)・同國(由利)

中館…陸奥(西津輕)・羽後(由利)・常陸(眞壁)・北海道(檜山) 中樞…甲斐(中巨摩)

更に、間館(陸奥、東津輕)・角館(羽後仙北)・内館(羽後雄勝)・裏館(越後三保市)等も此の類型に屬するが、何れも語義の性質上、館名聚落の集團地域に位置せる事は當然である。

(d)新舊を附するもの

古館は陸奥(東津輕)・陸中(紫波及膽澤)・羽後(仙北)・羽前(東村山)・岩代(北會津及郡山市)・越中(西礪波)・常陸(筑波)・上野(邑樂)の各地に夫々指摘し得。伊勢龜山町には舊館の大字名がある。羽後(由利及北秋田十二所町)の元館及び同國(山本)の本館、羽前(寒河江町)の本館も

之に類屬する。

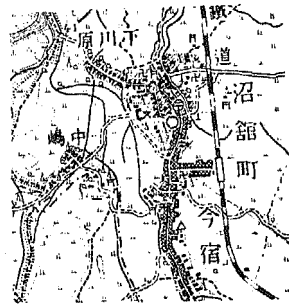
新館は陸奥(南津輕・上北及三戸)・羽後(北秋田)・磐城(田村及相馬)・岩代(北會津及河沼)・越後(北蒲原)等に於て見出される。是等新舊の名稱は、館聚落の増加を記念するものであり、特に新館の如き新田開發による村落では、タテ地形そのものとは交渉の無いものもある。越中(西礪波)の館新の如き、最も新鮮なる村落名である。

(e)他の地形語を附帶せるもの

山館と平館とは、その所在地形を表示せる館名聚落では最も普通のもので、若し是等の聚落を歴史的(即ち武士居邸としての)發生に解するならば、此の兩者の對立は、城郭に於る山城平城の區別とその軌を一にする。羽後(北秋田)の山館・及び同國(飽海)の山樞、陸奥(東津輕)・陸中(岩手)・陸前(栗原)の各平館は、その例であるが、その地形は必ずしも明瞭な對照を示してはゐない。沼館と呼ばれる聚落は、羽後の沼館

町を始め、陸奥(三戸・東津輕及西津輕)・羽後(北秋田)等に見えるが、何れも沖積平原上に位

第四圖



1:50000 (浅舞)
御物川畔の低平な自然堤防上に位置してゐる。

置してゐる。喜田博士によれば、山館・平館と相並んで利用された要害の一であり、後三年役に清原氏の據つた沼柵も是であらうと。沖館と呼ばれるものも山麓線を離れた平原内に在る。陸奥(東津輕及南津輕)・越後(北蒲原)にその例がある。その他山館に類す可き高館は陸奥(南津輕)・陸中(上閉伊)・陸前(名取)に指摘され、その所在地を表はす濱館(陸奥東津輕)或はその形状を示した丸館(陸中鹿角)・圓館(陸中岩手)・

伏館(陸中九戸)・切館(岩代岩瀬)が挙げ得る。

館の下に他の地形語を附したものは、館山と館野が最も多い。館山は陸奥(南津輕)・羽前(米澤市)・磐城(伊具)・加賀(石川)及び安房に見受けられ、同型の館岡は陸奥(西津輕)・陸中(東磐井)・羽後(南秋田)・岩代(岩瀬)に捨ひ得る。羽前では楯山(東村山)・楯岡町に作り、遠く伊賀にも楯岡なる大字がある。館野は岩代(安達)越後(西蒲原)・羽後(由利)等に例示されるに過ぎないが、同意義と解す可き立野は頗る多く、共に洪積臺地上に立地するを普通とする。館原(岩代耶麻)・館澤(北海道檜山)の如きもある。地性を示す語を持つものに、岩館と土館とがあり、陸奥(二戸及南津輕)・羽後(山本及由利)に前者を陸中(紫波)・羽後(雄勝)に後者を挙げ

第五圖



1:50000 (岩館)
結核と津輕の要害を
出羽と津輕の要害を
ぶ海岸下に漁村(舊
聚落)があり、街村
丘上の道路に
新聚落が連る。

得るが、何れも其の實際の景觀に應じてゐる。

(f) 館を媒介として聚落の位置地形を示せるもの

タテの地形を最もよく表示するに適當な地名に館ノ下・館越がある。館ノ下は段崖下に位置してゐる。陸中(江刺及東磐井)・陸前(玉造)・羽後(河邊及山本)にその例を得るが、北海道檜山郡の館下は歴史的东西のものと考へられる。同型の館前は陸奥(西津輕)・羽後(由利・仙北及平鹿)の各地に見える。

第六圖



1:50000 (能代)

第七圖



1:50000 (五城目)

館越は道路がタテを横切る地點にあり即ち一の峠聚落である。羽後(南秋田)・陸前(名取)・岩代(伊達)に之が見られ、陸中(岩手)・越後(岩船「村名」)では館腰と書かれ、陸奥(北

津輕)には館野腰なる大字名もある。此の他、館迫(陸中和賀)・館端(岩代大沼)・館開(能登羽咋)・館内(信濃北安曇)の如きがある。

(g) 植物名を附したるもの

陸奥(三戸及南津輕)・陸中(角鹿)・羽後(北秋田)の各地に松館なる聚落あり、内前二者は夫々杉館と近く對立してゐる。笹館(陸奥中津輕及羽後北秋田)・胡桃館(陸奥北津輕)・柳館(羽後河邊)の如きもあるが、何れもタテ上の自然植生を指示せるが故に、近世城郭に於ける櫻・鶴等の雅名とは性質を異にする。但し陸奥南津輕の竹館は唐竹・沖館の主要村落による新村名であり、羽後(仙北)の花館・同國(北秋田)小館花の花は端と解した方が、自然に適つてゐる。上野の館林乃至陸奥(南津輕)の館田・加賀(能美)の館畑「村名」は夫々の景觀上の命名であらう。

動物名を附したものは少く、牛館(陸奥東津輕)・馬館(陸前玉造)があるに過ぎない。

(h) 其の他の館名聚落

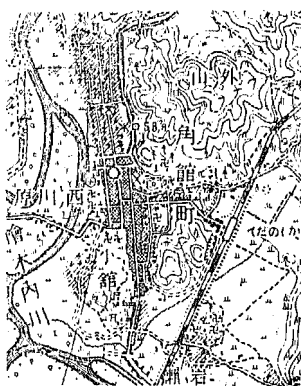
ツキタテと云ふのは非常に多い。ツキは築山・築地のツキと同じ意味だらうか。陸中(東磐井)陸前(栗原)の各築館町を始め、陸奥(西津輕)羽後(由利)の築館、陸奥(東津輕)の築木館、或は陸奥(二戸)・岩代(伊達)の月館乃至羽前(最上)の月楯はすべて其の例である。

以上の館聚落名が大體に於て、簡單で、自然發生的で、類型の多いのに反して、次に擧げるものは、解釋も困難であり、類型も少い。先づ二ヶ所以上に認め得た者では、福館(陸奥東津輕及羽後北秋田)、赤館(羽後大館町及能代港町)館市(陸奥三戸及陸中下閉伊)の三つである。その他では陸奥の天間館(上北)、田舎館・藏館・八幡館(何れも南津輕)、羽後の國館(仙北)・妹尾館(北秋田)、越中の弓館(中新川)、常陸の關館(眞壁)等を拾ひ得るが、數は少い。更に附近の或は所在地の、他の地名を冠せる第二次的な館名聚落では越中の水橋館(中新川)、陸中の晴山館迫(和賀)がある。

以上若干の實例によつて理解される如く、館名聚落に於ける館への附帶語については

- 1、直觀的で簡單な事
- 2、國語と認め得べき事
- 3、新舊上下、東西等の對稱語が多い事
- 4、全體として、極めて變化の少い事等の諸相が考へられる。

第八圖



1: 50000 (角館)

御物川の支流玉川とその支流檜木内川の合流點の要害地を占め、古來豪族の多く出れる所である。

4、結語

館の字がついて、之をタテと讀む聚落を館名聚落としたが、等しくタテと呼ばれる聚落名が他にあるから、最後に之について一言する。

立の文字がつき、タテと訓する地名がある。

就中立野と云ふのは、地形上から云つて最も館名聚落の變形(即ち館野の變化)と見なし得るものである。越中礪波平野の南縁には立野ヶ原なる洪積臺地があり、金澤市にも小立野なる開析された臺地がある。後者について、龜の尾の記(卷二)には「此地形は、追く、豎長きを以て小立野と云ふと云ふ」とあるが、小は寧ろ、第二次的な接頭語であらう。陸奥(東津輕)にも小立野の大字名あり、その他、上總(姉崎町)・下總(香取)・甲斐(北都留)・伊豆(賀茂及四方)・遠江(磐田及濱名)・美濃(海津)・伊勢(飯南)・大和(生駒・高市及吉野)・但馬(城崎及朝來)・周防(熊毛)・土佐(長岡)・筑後(八女)・肥後(菊池)等、全國到る所に之を見る。此の他、前節に挙げた館名聚落と音を同じうする者を二・三示せば、陸中(下閉伊)の立腰、甲斐(南巨摩)の本建、上野(北甘樂)の古立、三河(南加茂)の御立、美濃(郡上)の切立等があり、何れも館名聚落の變形と

見得る。又、折立と云ふ地名は下總(千葉)・越前(足羽)・美濃(稻葉)・大和(吉野)の山間に見られ、溪谷間の絶壁を意味するらしいから、意義は館である。信濃松本市に近き島立にも邸宅史傳が存し、前掲筑前(遠賀)の館屋敷も一に立屋敷と記し、又他面からの館名聚落と立名聚落との關聯處在を暗示してゐる。

豎のつく聚落は少い。金澤・甲府・姫路等の都市に於ける豎町は、方向に關せる者で、全く別の意義をもつてゐる。

ともあれ、館名聚落の分布は、大體に於て東北に限られ、その西邊を敢て求めるならば、日本海岸に於ては越中・能登、太平洋側にては關東平野であらう。而して、前述せる如く、かゝる聚落名の生成は、柳田先生の説かるゝ、地形的用語に因ると考へるのを妥當とするが、從來の如き武士邸宅に因らんとする考へ方も必ずしも否定し難い。

又、新田開發による聚落の増加や、單なる地

名の流用性乃至は町村制の發布等^(註)もあるから、地形と無關係な館名聚落も増加したであらう。夫はあたかも武士居館の傳説が必ずしも信用するに足りないのと同じく、タテの地形的解釋も何處でも成立し難い事になる。筆者の寡聞によれば、現在では「タテ」と云ふ言葉が東北にても存在しないのであるから、唯、残される事は多數を以てする歸納のみである。要は個々の聚落名成立の由來と、その語源その者の解釋とは別個の問題である。

〔註〕

江州信樂燒の立地的觀察 (三)

杉 山 精 一

(ハ) 資 本
日本の各地方の陶業地を見るに、多くは仲買

江州信樂燒の立地的觀察

人が優勢で製造家は家業の保證を握られてゐるため、利益は多く仲買人に奪はれ、實に勞働力

- 1、柳田國男 地名の研究
- 2、秋田縣史二 一三八頁
- 3、六郡郡邑記 享保十五年(山本郡郷土史處收)
- 4、喜田貞吉 四十二箇概観(秋田史壇一、秋田縣郷土誌處收)
- 5、二三の例をあげれば陸奥國上北郡浦野館村は、上野・新館・大浦の三聚落名により、同國南津輕郡宮ノ木館村は宮柳・水木・福館の三聚落名により、同郡竹館村は唐竹・沖館の二聚落名によつて、新造された村名であり、羽後北秋田郡に於て大館町と鼎立せる東館村及び西館村は夫々主要聚落新館及び笹館を中心とせる對稱的新村名である。